

Luncheon Linguistics, 13 June, 2018

2018 (平成 30) 年 6 月 13 日

「フィンランド語と北サーミ語の非定形補文節」

発表者：梅田 遼 (オウル大学 / 東京大学大学院博士課程)

本発表では、ともにフィン・ウゴル系の言語であるフィンランド語と北サーミ語の非定形補文節 (non-finite complements) について、基本的な統語構造について記述した上で構文の意味的な分類を行い、さらにそれらを類像性の観点から分析することを試みた。

フィンランド語と北サーミ語の非定形補文節は統語構造の観点から繰上げ構文とコントロール構文の 2 つに分類できる。動詞意味論の観点からいえば、フィンランド語・北サーミ語の両方において、繰上げ構文を形成する動詞は典型的には認識・認知・発話 (Perception-cognition-utterance (PCU) verbs, cf. Givón 2001) に関わる動詞であり、一方コントロール構文を形成する動詞は願望・許可使役・命令・強制使役の動詞などである。

繰上げ構文に関しては、フィンランド語も北サーミ語も動詞の意味にかかわらずほぼ同じ統語構造を示すが、コントロール構文においては、フィンランド語は動詞の意味によって現在分詞・A 不定詞・MA 不定詞入格形という 3 つの動詞非定形が現われる一方、北サーミ語においては不定詞のみが見られるという差異が見られる。また、コントロール構文における非定形節の主語の格標示も、北サーミ語では属対格のみだが、フィンランド語においては属格・対格・分格という 3 種類の格標示が現れうるという差異が見られた。

本稿では、最後にフィンランド語のコントロール構文において複数の動詞非定形が見られる理由について、類像性のスケールを提示することによって説明を試みた。結果として、フィンランド語の非定形動詞の形態と動詞の意味には明らかな相関が考えられるものの、非定形動詞全体のシステムに照らし合わせてそれをどのように解釈すべきかには不明な点が残った。本稿の結論としては、北サーミ語の不定詞のカバーする意味範囲が非常に広いこと、また、類像性の観点からフィンランド語・北サーミ語の非定形補文節の形態統語的特徴を動詞意味論に基づいたスケールに位置付けることが可能であることを示すにとどまった。